

会長就任にあたって

公益社団法人 日本証券アナリスト協会
会長 新 芝 宏 之 CMA



会長就任にあたり一言ご挨拶申し上げます。

今、アナリストに求められる役割は、大きく変わってきております。

私が初めてアナリストという職業、資格を知ったのは、就職活動の時でした。岡三証券（現岡三証券グループ）の当時の調査部長からバイオテクノロジーに関する講演を聴き、未来を知ることワクワクし、入社を決めました。産業調査部に配属され、毎朝、鉄鋼新聞を読むことから始まり、ルーティーンは会社訪問。業績見通しの変化の兆候をいち早く見つけてくることはもちろん大切でしたが、会社ごとの夢を探してることが大変楽しかった時代でした。当時は、世界の投資家にとって、わが国はいわば新興国であり、成長株を発掘してることが醍醐味で、日本株を世界に売り込む国際部門が全盛の時代でした。

その後、本協会の教科書の執筆者でもあった教授による少人数の勉強会に参加したことで、証券分析ががぜん面白いと感じるようになり、教科書を越えた最先端の投資理論には大いに刺激を受けました。そのころ社内でもデータベースが整備され、スプレッドシートのマクロを使って簡易に様々な実証分析が可能になりました。

1997年からは、約4年間、日本証券アナリスト協会会長代行を経て会長職をつとめた岡三証券グループの故加藤精一会長の秘書として仕えました。わが国金融界にとって、戦後続いた様々な旧体制、アンシャンレジームが壊れた節目の時代だったと思います。

20年前の当時、日本版ビッグバンとインターネット革命が両輪となってビジネスが変貌しました。今、その既視感も感じています。日米欧での「制度改革」、AIに牽引される「技術革命」の両輪を背景に、アナリストを取り巻く環境が大きく変化し始めています。例え

ば、フェア・ディスクロージャー・ルール等によって、いわゆる「早耳情報」の収集はできなくなる一方で、ビッグデータの活用が飛躍的に進み、衛星写真の解析による予測等、いわば合法的にインサイダー情報に近いデータを収集、推計するといったことが既に行われています。こうした新しい時代を迎えて、アナリストの真価が改めて問われています。

かつてアナリストは個別企業を分析することから始まりましたが、その後、債券、ファンド、ポートフォリオ、金融商品等の領域まで分析の対象は広がっています。活躍の場も、調査、資産運用、投資銀行業務、営業、そして、一般事業会社の財務、IR等、多様な分野へ展開しています。特に、資産運用ビジネスにおける存在感が高まると同時に、企業経営者との対話を通じて、経営戦略への影響力もますます強まっていると感じています。

アナリストの制度が歴史を積み重ねてきたからこそ、昨今では経営者層にもアナリストの経験者、資格者が増えました。先日、社外取締役としても活躍されている先輩アナリストの方が、「社外取締役の役割は、企業価値そのものを高めるために貢献すること」と力強く話しておられました。アナリストとは、時代と共に変わっていくのだと考えています。皆さんと一緒に新しい社会的役割を果たしていきたいと思っております。

アナリストの皆さんが更に活躍できますように、全力で取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

新芝 宏之 (しんしば ひろゆき)

株式会社岡三証券グループ 代表取締役社長

2009年 当協会監事

15年 副会長

17年8月 会長就任